

## 倭寇的状况下の薩摩

松 尾 千 歳

### 1. もう一つの戦国日本

京都の学僧・藤原惺窩（1561～1619）は、中国文化に強いあこがれを抱き、朱子学を極めようと中国渡海を決意し、文禄5年（1596）、中国渡海の窓口となっている薩摩（ここでは島津氏領国を「薩摩」と記す。以下同）を訪れた。この時、彼が見聞・体験したことを記した日記が一部残っている。『南航日記残簡』である<sup>(1)</sup>。

この『南航日記残簡』を紐解くと、惺窩が京都では想像も出来なかった光景を目の当たりにし、驚いている様子がみてとれる。

まず彼が最初に上陸したのは、大隅国内之浦（現鹿児島県肝付町）であった。

内之浦、今は日本各地にあるような普通の何の変哲もない漁村だが、惺窩が見た内之浦は全く違っていた。海外交易で賑わう港町で、彼が会った内之浦の住民の多くは、ルソン（フィリピン）など



内之浦（現鹿児島県肝付町）

海外との交易に従事している人たちであった。彼らから接待を受ければ、出てきたものは「勝酒（焼酎）」「葡萄酒（ワインか）」「異域珍肴」など惺窩がみたことがなかったようなものばかり、酒は「ルソン瑠璃盞（ガラスの盃）」で酌み交わした。話題は海外のことで、ヨーロッパ製と

(1) 『高柳光壽史学論文集』下（吉川弘文館・1970年）収録

思われる世界地図も見せられている。中国人もいたし、銅鑼を打ち鳴らし入港する中国船も目撃している。当時は、豊臣秀吉による朝鮮出兵の最中である。和平交渉がおこなわれている時期とはいえ、朝鮮半島で戦っている相手国の船が、何事もないかのように来航しつづけていたのである。

次に内之浦の北にある波見（現肝付町）に向かったが、ここにも中国船が停泊していた。惺窩は船主の中国人商人と、「蜜漬の天門冬・梨実・冬瓜など」を肴に蜜酒を酌み交わし筆談している。ちなみに、波見の北を肝付川という川が流れているが、川の対岸は「唐仁」（現東串良町）という所で、この地名はかつて多くの中国人たちが暮らす中華街だったことに因む。

惺窩は、当時一流の文化人・儒学者であった。中国や海外の情勢・文化に関しても、一般的な日本人よりはるかに豊富な知識を身に着けていたであろう。その惺窩が、薩摩の地で目の当たりにした光景に強い衝撃を受け、日本が狭隘で、世界が至大であることを思い知らされ、視野を世界に広げるべきであると痛感させられているのである。

このように、戦国武将たちが己の勢力拡大を図り、天下統一を目指して戦いを繰り返していた頃、南九州など東シナ海に面した地域においては、国への所属や国境にとらわれない人たちが盛んに活動していた。そして日本の他地域とはやや異なる歴史・文化を育んでいたのである。

なお、惺窩は中国渡海には失敗し、京都に戻った。そして朝鮮出兵で捕虜となっていた朝鮮人儒学者姜沆から朱子学を学び、「京学派」という朱子学の一派を開いている。惺窩の弟子の一人が林羅山で、彼は徳川家康に仕え、江戸時代、羅山の子孫・林家の人たちが幕府の文教を司った。

## 2. 海の道

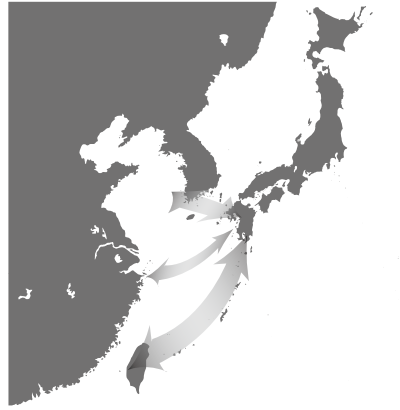
帆船の時代、船はできるだけ陸地の近くを通して次の目的地を目指した。このため、大陸に近い九州は海外交易の拠点となっていた。

鹿児島や坊津など南九州からは、奄美・沖縄の島々が点々と連なり、中国大陆へと伸びていた。これを伝う海上交易路は、「海の道」「海上の道」などと呼ばれ、博多や平戸など九州西北部の港から壱岐・対馬・五

島を経て大陸へと延びた海上交易路とともに、日本と大陸を結ぶ主要海上交易路となっていた。

かつて、西九州や南九州の海・港には、数多くの外国船が浮かび、あちこちに外国人居留地が形成されていた。

例えば、朝鮮出兵が始まって間もない万暦21年（文禄2・1593）、明の福建巡撫（長官）の許孚遠が、日本の状況を調べるため工作員（スパイ）を薩摩に派遣している<sup>(2)</sup>。工作員を乗せた船が入港したのも内之浦であった。彼らは島津家に仕える中国人家臣の手助けを受け、朝鮮出兵の拠点となっている名護屋城などの様子を探っている。工作員の報告を受けて許孚遠が秀吉への対処方を皇帝に上申した『請計処倭酋疏』に「薩摩はいつもいろんな国の船が停泊する所で、ルソンに向かう船が三隻、交趾（ベトナム）船が三隻、柬埔寨（カンボジア）船が一隻、暹羅（タイ）船が一隻、仏郎機（ヨーロッパ）船が二隻いた」とある。中国船の存在は記されていないが、工作員が乗って来た船を含め複数存在していたと思われる。

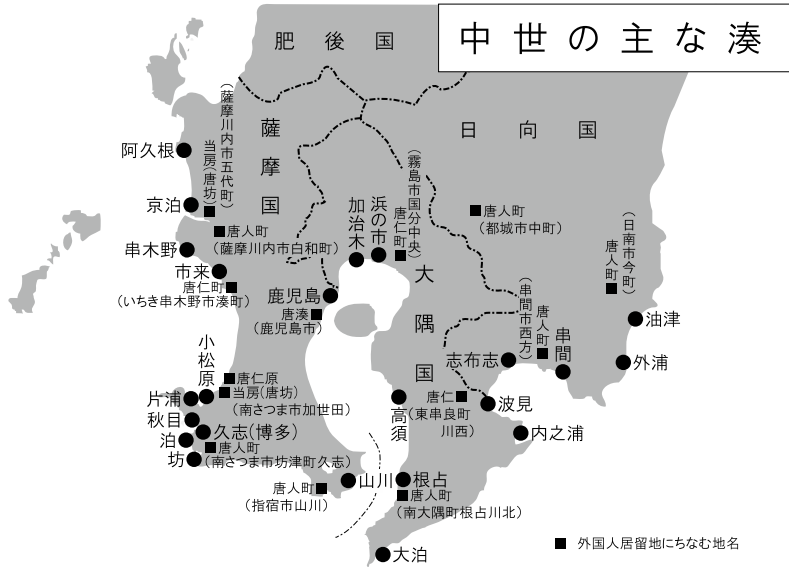


また、先に紹介した波見近くの「唐仁」（現東串良町）だけでなく、南九州には、「唐湊」（鹿児島市）、「唐仁（唐人）」（霧島市国分中央・南さつま市加世田・同坊津・指宿市山川・いちき串木野市湊町・南大隅町根占・宮崎県都城市・同串間市・同日南市など）、「唐坊（当房）」（南さつま市加世田・薩摩川内市五代町など）など「唐」がつく地名が数多く残されている。これらは外国人居留地があった名残である<sup>(3)</sup>。

薩摩に住み着いた中国人の中には島津氏の家臣になる者もいた。医師の許儀後、郭国安（汾陽理心）、卜占で仕えた黄（江夏）友賢らである。

(2) 増田勝機『薩摩にいた明国人』（高城書房、1999年）、許孚遠「請計処倭酋疏」『敬和堂集』巻5（国立公文書館デジタルアーカイブ <https://www.digital.archives.go.jp/DAS/meta/listPhoto?LANG=default&BID=F1000000000000105291&ID=M2014080420303169966&TYPE=&NO=>）

(3) 柳原敏昭『中世日本の周縁と東アジア』（吉川弘文館、2011年）



### 3. 明の海禁政策

1368年、朱元璋（太祖・洪武帝）が明朝を樹立させた。その明は皇帝を頂点とし、周辺諸国の王をその家臣とする世界秩序体制を築こうとし、日本はその影響を強く受けた。

明が採った制度は、皇帝が周辺諸国の国王に王位の位を授ける（冊封）というものであった。家臣となった国王は、主である皇帝へ貢ぎ物を捧げ（進貢・朝貢）、



皇帝は貢ぎ物に対する返礼品を国王に授ける（回賜<sup>かいし</sup>）。そして、周辺国の国王に対しては、国王の金印と正式な使者に持たせる「勘合<sup>かんごう</sup>」という符驗<sup>ふげん</sup>（外交資格証明書）を受け、進貢使には国王の印を捺した勘合を所持させることを義務づけ、使者を受け入れる窓口として、広州（広東）・泉州（福建）・寧波（浙江）の港を開き、ここに市舶司<sup>しはくし</sup>を置いて管理に当たらせた。

冊封とそれに伴う朝貢・回賜が中国と周辺諸国の唯一の外交・交易手段とされた。これが朝貢貿易である。日本では勘合を用いることから勘合貿易とも呼ばれた。さらに、明はこの体制を維持・強化するため、一切の私貿易、一般国民が私かに海に出ることを禁じた。それが海禁である<sup>(4)</sup>。

日本も明の冊封を受け入れた。まず建徳2年（応安4・1371）南朝方の征西將軍宮の懷良親王<sup>かねなが(よし)しんのう</sup>が冊封を受け入れ、翌年、明の洪武帝は懷良親王を「日本国王」に封じた。しかし、この時、すでに懷良親王ら南朝方の勢力は衰退しており、朝貢はおこなわれなかった。

ついで、応永8年（1401）足利義満が明に冊封を求める使者を派遣し、翌年、建文帝から「日本国王」に封じられ、朝貢貿易がおこなわれるようになった。当初は毎年のように遣明船が派遣されていたが、天皇の存在を無視し、将軍が明から日本国王の称号を授けられることに対する反発があり、中断を繰り返した。さらに貿易の主導権を巡って、博多商人と結びついた大内氏と堺商人と結びついた細川氏が激しく争った。なお、日本から明への主要輸出品の硫黄の産地が南九州だったこともあり、島津氏は朝貢貿易に早くから係わるようになっていた。さらに大内氏が瀬戸内海を押さえ、堺商人の船はここを通行できなかったため、土佐沖を経由して南九州に向かい、ここから中国を目指した。このため島津氏は細川氏から遣明船の保護を依頼され、より深く朝貢貿易に関与するようになった。いかに堺の商人と島津氏とが強い結びつきを持っていたかは、慶長5年（1600）の関ヶ原合戦で敵中突破を敢行して戦場を離脱した島津義弘が堺に身を隠し、田辺屋道与ら堺・住吉の商人たちが、徳川方の強い監視にもかかわらず、命がけて義弘ら島津の将兵を匿った

(4) 荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』（吉川弘文館、2010年）、同『日本の対外関係5』（吉川弘文館、2013年）

ことからもうかがえる。なお、この時、義弘が田辺屋に御礼として教えたのが秘伝の製薬方法であった。田辺屋はこれをもとに製薬業に乗り出した。それが現在の田辺三菱製薬に繋がっている。

朝貢貿易に話を戻す。日本の遣明船の派遣時期・隻数は、前述のような日本側の混乱を反映して明の指示が守られなかった。期限が切れた古い勘合を用いることもあり明を困惑させた。大永2年（嘉靖2・1523）には、中国の寧波で大内船と細川船の使節たちが衝突し、細川船が焼き沈められただけでなく、彼らは寧波の町を焼き、明の官僚を殺害し（寧波の乱）、明側を激怒させている。さらに後述のように倭寇が中国沿岸を荒らし回っていたこともあって、明は日本を冷遇し、日本では朝貢貿易がうまく機能しなかった。

その一方で、琉球王国では朝貢貿易がうまく機能していた。琉球王府が朝貢に熱心だったことに加え、明側も琉球を南海産品入手の窓口と位置づけて優遇したからである<sup>(5)</sup>。

『明史』に周辺諸国からの朝貢回数が記されている。最も多いのが琉球で171回、2番目が安南（ベトナム）89回で、烏斯蔵（チベット）78回、哈密（ウイグル東部）76回、占城（ベトナム）74回、暹羅（タイ）73回、トルファン（ウイグル）41回、爪哇（ジャワ）37回、撒馬兒罕（ウズベキスタン）36回、朝鮮30回と続く。日本はわずか19回である。朝貢は、国ごとに定められ、また時代によっても変化したが、おおむね3年に1回程度であったが、琉球はほぼ毎年、あるいは2年に1回程度であった。このため、合法的に中国製品を入手しようとする人たちが琉球を目指すようになった。日本各地の船、さらに朝鮮の船も「海の道」を盛んに行き交うようになり、「海の道」、そしてその終着点となっていた南九州の港の重要性が増したのである。

#### 4. 倭寇

14世紀から16世紀にかけて、中国大陸沿岸部を倭寇が襲撃していた。ただ倭寇といっても、14世紀の倭寇と、16世紀の倭寇は全く別のもので

(5) 黒嶋敏『琉球王国と戦国大名』（吉川弘文館、2016年）、豊見山和行編『日本の時代史18 琉球・沖縄史の世界』（吉川弘文館、2003年）、高良倉吉『琉球王国』（岩波新書、1993年）

あった<sup>(6)</sup>。

14世紀の倭寇は、文字通り日本人の海賊集団で、主として朝鮮半島沿岸部を襲撃して、米穀など生活必需品、労働力としての人民を強奪していた。高麗王朝はその対応に迫われ、倭寇対策を主導していた李成桂が、恭讓王4年（明徳3・1392）、高麗王朝を滅ぼして李氏朝鮮を打ち立てた。李氏朝鮮は武力で倭寇を封じると共に、様々な懐柔策で倭寇の沈静化をめざした。これが功を奏し、15世紀後半には朝鮮半島を荒らす倭寇は次第に少なくなっていく。しかし、これと入れ替わるように16世紀には中国沿岸部から東南アジアの広い範囲を倭寇が襲うようになったのである。

14世紀に朝鮮半島を荒らした倭寇を一般に「前期倭寇」、16世紀中国大陸を荒らした倭寇を「後期倭寇」という。前期倭寇が、文字通り日本人海賊であったのに対し、後期倭寇は明の海禁政策に反発する武装集団であった。しかも、主体は中国人であった。

後期倭寇がもっとも猛威をふるったのは、「嘉靖の大倭寇」と言われる嘉靖年間（1522～66）である。そのまっただ中の嘉靖41年（永禄5・1562）、明の地理学者・鄭若曾<sup>ていじゃくそ</sup>が倭寇に関する情報を集めて『籌海図編』<sup>ちゆうかいずへん</sup><sup>(7)</sup>という本を編纂している。その巻11「叙寇原」には「今の海寇は動もすれば数万<sup>かぞ</sup>を計え、皆、言を倭奴に托するも、その実は日本より出る者は数千を下らず、その余はすなわち皆、中国の赤子・無頼なる者」と、倭寇といっても日本人は1割程度で、大半は中国人だとある。また同じく明で刊行された『嘉靖東南平倭通録』の嘉靖32年（天文22・1553）10月の条に「蓋し江南の海警、倭は十の三に居るも、中国の叛逆は十の七に居るなり」と、日本人が3割、中国人が7割と書かれている。

また、『明史』「志第57、食貨5」の「市舶」に、嘉靖年間に倭寇が盛んになったのは嘉靖2年（大永3・1523）の寧波の乱を機に、日本の入貢が止まり、勘合貿易に従事していた者たちが倭寇に転じたからだと言われている。確かに、寧波の乱を機に遣明船の派遣は大内氏だけとなり、

(6) 前掲『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』・『日本の対外関係5 地球的世界の成立』、村井章介『アジアの中の中世日本』（校倉書房、1988年）、田中健夫『倭寇』（教育社、1982年）

(7) 国立公文書館デジタルアーカイブ（<https://www.digital.archives.go.jp/das/image-j/M2016090911513355318>）

てんぷん

天文20年（1551）にその大内氏も滅亡したため、天文18年の派遣を最後に途絶えた。

この頃、室町幕府の権威は失墜していた。15世紀末には管領の細川氏が幕府実権を握り、16世紀初頭にはその細川氏も内紛を繰り返し、やがて家臣の三好氏に実権を掌握されてしまう。天文17年には、管領細川晴元が前將軍足利義晴とともに三好長慶の手で京都から追放された。晴元は京都奪還を何度か試みるが、三好に阻まれ、永禄6年（1563）に没した。さらに13代將軍足利義輝は、永禄8年に三好氏・松永久通らの軍勢に襲撃されて殺されてしまう有様であった。

將軍の権威失墜・喪失により、日本国内の混乱に拍車がかかり、明皇帝と日本国王という国家間の使節のやりとりを基本とする朝貢貿易は崩壊した。

その一方で、幕府権力からの呪縛から解き放たれた戦国大名・商人・海賊たちは自由に活動するようになった。特に海外交易が盛んな地域・九州では、国家の束縛から解き放たれた人たちが、国境を跨いでより自由に行き来するようになった。貿易の主流は、朝貢貿易から倭寇主体の密貿易へと移ったのである。それとともに東アジア全体に大きな変動が起き、旧体制が崩壊して新体制が構築される状況が起こる。日本では室町幕府の権威失墜し、戦国大名が己の勢力拡大を図って争い、その中から豊臣秀吉・徳川家康が台頭し、ついには徳川幕府で混乱に終止符が打たれる。中国では「北虜南倭」といわれるように、北部国境地帯ではモンゴル族などが侵略の機会をうかがい、沿岸部、特に中南部では倭寇たちが猛威をふるった。そしてついには満州族が興した清国が明国を滅ぼし、中国を支配するようになった。立教大学の荒野泰典名誉教授は、こうした状況を「倭寇的状况」と名付けている<sup>(8)</sup>。

特に南九州は「倭寇的状况」が著しいところであった。

まず中国で、朝貢貿易と海禁の影響をもっとも受けたのは、中国南部の浙江・福建・広東の商人たちであった。もともと彼らは海上交易で生計を立てており、これを放棄させることは困難であった。また、中央から遠く離れていたため、海防・監視体制は不十分で、軍・官・民の癒着もひどかった。日本の中でこの地域と密接に結びついていたのが南九

(8) 荒野泰典『鎖国を見直す』（岩波書店、2019年）



州で、中国人倭寇たちも南九州に拠点を構えた。

先に紹介した『籌海図編』、その巻2「倭国事略」には、「入寇者、薩摩・肥後・長門三州の人居ること多し、その次則大隅・筑前・博多・日向・摂津・津州・紀伊・種子島」と、入寇者が多い地域の筆頭に薩摩が挙げられている。大隅・種子島、さらに日向も入寇者が多いところとしてあげられており、南九州が倭寇の巢窟となっていたことがうかがえる。

また、巻8「寇踪分合始末図譜」には、中国人倭寇の頭目徐海・金子老・李光頭・許東・王直らの動きが図示されている。その中の徐海は「和泉・薩摩・肥前・肥後・津州・対馬の諸倭」、陳東は「肥前・筑前・豊後・和泉・博多・紀伊の諸倭」、葉明は「筑前・和泉・肥前・薩摩・紀伊・博多・豊後の諸倭」を率いて入寇すると記されている。なお、薩摩と共に「和泉」「紀伊」が多いのは、和泉国に海外交易の拠点である堺があり、堺商人が薩摩と密接に結びついていたからであろう。また紀州国の根来衆・雑賀衆も海運・交易に携わる人たちであった。なお最初に紹介した藤原惺窩も、島津義久の居城がある富隈の浜の市（現霧島市隼人町真孝）で紀州の高野・根来が故郷だという巡宗という僧と会っている。巡宗は10年ほど前に紀州を離れ、しばらく琉球に滞在していたという。

次に、陳東の所には「（陳は）薩摩州君の弟、書記を掌る酋なり、その部下薩摩人多し」という註記がある。「薩摩州君」は、15代島津貴久の弟で、鹿籠（現枕崎市）を領有していた尚久であるとする説もあるが、陳東が中国を荒らしまわったのは、嘉靖34年（弘治元・1555）から同35年で、その頃、尚久は兄貴久に従い、大隅の蒲生（現始良市）攻略戦に加わっており、この説には無理がある。島津氏あるいはそれに準じる者を指しているのだろうが、島津一族が倭寇となって明に渡ったというような記録は見たことがない。

また巻5「浙江倭変記」の嘉靖35年8月条に「惣督胡宗憲、いつわりて賊酋幸五郎を放ち洋にだし、総兵盧鏜<sup>ろどう</sup>に命じこれを擒えしむ」と、また巻9「金塘之捷」嘉靖35年に「幸五郎は宿寇徐海の偏裨（副将）なり」「その志は全浙を呑み、留都（南京）を窺わんと欲す、勢い甚だ猛なり」とある。『明史』巻205「阮鶚<sup>げんがく</sup>伝」にも「盧鏜もまた幸五郎<sup>きん</sup>を禽し（捕らえ）て至る、幸五郎は大隅島主の弟なり」と書かれている（田中健夫『倭寇』）。これらは、中国人倭寇の拠点が薩摩であるとともに、大勢の薩摩

の人々、特に薩摩で巨大な勢力を誇る人たちが倭寇の仲間、あるいは手下として係わっていたことを物語っている。

なお、明は、隆慶元年（永祿10・1567）、福建巡撫の塗沢民<sup>とたくみん</sup>の上奏によって海禁を解除した。従来、非合法的活動として取り締まられていた私貿易が、公許の貿易とされたのである。ただ解禁されたのは南海貿易だけで、日本との貿易は従来通り禁止とされた。それでも効果は絶大で、倭寇の活動は急速に衰えていった。

## 5. 中国人倭寇とヨーロッパ人

後期倭寇が、中国大陸沿岸部を荒らしまわっている頃、ヨーロッパは  
大航海時代を迎えていた<sup>(9)</sup>。主役はスペインとポルトガル。進出先でしばしば衝突した両国は、1494年、大西洋上、西経46度37分）から東をポルトガル、西をスペインが支配するというトルデシリャス条約を締結した。

両国はこの条約に基づき、スペイン西へ進出したが、南北に長いアメリカ大陸、広大な太平洋に行く手を阻まれた。

一方、東を支配することになったポルトガルは、大西洋を南下してアフリカ各地に拠点を築き、1498年バスコ＝ダ＝ガマが喜望峰をまわってインドのカリカットに到達した。1510年にはインドのゴアを、翌1511年には東南アジアの要衝マラッカを攻撃して占領した。さらにマラッカから北上して中国を目指し、1517年から1522年にかけて使節団を派遣して明との国交樹立を図ったが、冊封体制を維持しようとする明はこれを受け入れず、合法的な交易の道は閉ざされた。このためポルトガル人たちは密貿易に転じ、倭寇と連携して活動するようになった。そして倭寇に導かれ、彼らの進出コースを逆走するような形で、中国南部から沖縄や奄美の島々を伝って北上し日本に到達したのである。

その結果、天文12年（1543）、3人のポルトガル人を乗せた中国人倭寇・王直（五峰）の船が種子島に漂着し（1542年とも）、鉄砲伝来、西欧では日本発見となった。さらに天文18年にはザビエルが鹿児島に上陸しキリスト教が日本に伝わった。ザビエルは「異教徒の中国商人（アバ

(9) 前掲『日本の対外関係 5 地球的世界の成立』、岸野久『西欧人の日本発見』（吉川弘文館、1989年）

ン、あだ名は海賊・ラドロンの船」で日本に来たと書き残している(1549年11月5日付ザビエル書翰)。鉄砲伝来もキリスト教伝来も中国人倭寇が関係していたのである。

このように、中国人倭寇の存在は日本の歴史にも多大な影響を与えていたのである。そして、日本とヨーロッパの出会いにとって重要な出来ごとが、あいついで南九州で起こるのも、ヨーロッパ人を導いた中国人倭寇の日本での拠点が南九州であったからに他ならない。

## 6. 薩摩から長崎へ

南九州は、日本とヨーロッパの出会いの舞台となったが、南蛮貿易の拠点にはならなかった。

ポルトガルは、貿易とキリスト教の布教活動とを一体化させていた。島津氏は貿易には熱心だったものの、キリスト教が広まることは望まず、布教に非協力的な態度をとり続けた。このためポルトガル船は島津氏領・薩摩にあまり寄港しなくなったのである。

ポルトガル船は肥前国平戸（現長崎県平戸市）に盛んに来航するようになったが、平戸領主の松浦隆信もキリスト教の拡大を嫌っており、永禄4年（1561）平戸での日本人商人とポルトガル商人が衝突し（宮ノ前事件）、ポルトガル側に多数の死傷者が出たことを機に、ポルトガル船は平戸を避けるようになった。

薩摩や平戸に代わってポルトガル船が寄港するようになったのは、豊後の大友宗麟、肥前の大村純忠・有馬義貞などキリスト教布教に理解を示す大名たちの領国の港であった。特に平戸に近い大村領の横瀬浦（現長崎県西海市）には多くのポルトガル船が寄港した。領主大村純忠は、貿易振興を図ろうと自らキリスト教に改宗し、初のキリシタン大名となった。しかし、こうした動きに仏教徒の家臣たちが反発し、永禄6年、横瀬浦を焼き討ちした。大村純忠は、横瀬浦に代わって福田（現長崎市）をポルトガル船の碇泊地に提供したが、福田は波浪の影響を受けやすくポルトガル人たちには不評であった。永禄11年、ポルトガル人たちは碇泊に適した港を探しはじめ、水深があって、東西を山に囲まれ、風波の影響を受けにくい長崎に目を付けた。そして元亀元年（1570）、彼らは大村純忠の許可を得て長崎を開港し町造りをはじめた。これを機に長崎

は短期間の内に交易都市として成長していったのである。

実は、薩摩の山川（現指宿市）・喜入（現鹿児島市）が第2の長崎になっていた可能性があった。『薩藩旧伝集』巻1の「鯨島円成坊と切支丹」<sup>(10)</sup>に、島津義久の代、1580年頃と思われる話が収録されている。それは、南蛮人たちが薩摩にやってきて、莫大な礼金をはずむから、山川より喜入の辺までの芦原、無用の地横一町（約109m）、長さ三里（約12km）ばかりを借地にしてもらいたいと願い出たというのである。大金に目がくらんでこれに応じるべきという者もいたが、島津図書（宮之城家、忠長）が、うまい話には裏があると反対したので取りやめとなったとある。

もしこれが実現していたら、薩摩の地も、長崎の様な町ができ、多くのポルトガル船が来航して南蛮貿易の拠点となっていたかもしれない。

## 7. 天下統一と倭寇的状况

16世紀後半、日本は各地に戦国武将が割拠し、己の権力・支配地域を拡大するためにしのぎを削っていた。そうした状況下、織田信長が勢力を急拡大させ、織田政権を受け継いだ豊臣秀吉が天下統一を成し遂げた。そして、慶長5年（1600）の関ヶ原合戦で徳川家康が勝利を収め、同8年江戸幕府を開き、乱世の時代は幕を下ろした。

一般に戦国時代を語る時、この日本国内で繰り広げられたストーリーで語られることが多い。だが、これと同時並行で、国家権力の呪縛から解き放たれた人たちが、大海原をまたいで自由に海外交易をおこなっていた。いわゆる「倭寇的状况」である。天下統一に向けた動きは「倭寇的状况」を終わらせる動きでもあった。天下統一を成し遂げた豊臣政権、そしてそれを継承した徳川政権も、明確に外交・交易権は国家権力が持つ、管理するという方針を明確に打ち出しており、「倭寇的状况」の存続を許さなかったのである<sup>(11)</sup>。

さて、その「倭寇的状况」の恩恵を最大限に受けていた大名が島津氏であった。島津氏も天下統一を目指していたが、都から遠くはなれていたため、天下統一の波に乗り遅れたというようによく思われている。し

(10) 新薩藩叢書刊行会編『新薩藩叢書（一）』（歴史図書社、1971年）

(11) 山本博文『鎖国と海禁の時代』（校倉書房、1995年）、同『寛永時代』（吉川弘文館、1989年）

かし、島津氏は天下統一など目指していなかった。島津氏が目指していたのは、祖忠久が源頼朝から与えられたという三州（薩摩国・大隅国・日向国）の統一であり、兵を九州北部に進めたのは、三州支配をより強固のものとするため、あるいは島津の力を借りたいと来援を求められ「他国ノ覚」「外聞」を重視しこれに応えたからであった<sup>(12)</sup>。むしろ「倭寇的状況」の継続を願い、天下統一の動きに抵抗していた。そして抗いきれず、豊臣秀吉・次いで徳川家康の軍門に降った。それとともに「倭寇的状況」も終息し、文禄5年（1596）に藤原惺窩<sup>せい か</sup>が内之浦で目にしたような光景は、見ることができなくなり、忘れ去られてしまったのである。

（尚古集成館館長）

---

(12) 新名一仁『島津四兄弟の九州統一戦』（星海社、2017年）

